

- 2 次の文章を読んで、以下の問い（問1，問2）に答えなさい。

現代社会を形容する視点はさまざまだが、人とのかかわりから見れば、モノの氾濫^{はんらん}も含め情報過多の社会に変化したということである。ある特定の領域に詳しい人々が、その分野の知見を深め、やがてそれがスタンダードになる。かつてはその領域に属する人々だけに限られていた情報が、メディアの発達によってだれにでも触れられる情報になった。望むと望まざるとにかかわらず、それらの情報が一方的に入ってくる。そうした現象があらゆる領域で起きているのだから、当然人々は日々増え続ける情報にさらされることになる。（第1段落）

一方、人の変わらない部分とは何だろうか。おそらくそれは、情報処理能力である。人は外部から情報を取り入れ、すでに蓄積された情報、すなわち経験や知識、記憶などと照らし合わせて分析し、行動を決める。情報処理は人が生きていく上での基本であるが、同時に脳の基本的な機能であるとも言える。確かに情報処理に必要な経験や知識は増えたのだが、脳の情報処理機能そのものが変わったわけではない。人の脳は数万年という時間をかけて、現在のような基本的機能を進化させてきた。脳機能が、社会の変化ほど急激に変わることはないのである。事実、ヒトの脳の基本的機能が変化したという話は聞かない。（第2段落）

情報過多という大きな変化と変わらない脳機能の間で、混乱し疲弊しているのが現代人であると言えるのではないだろうか。こどもが成長に伴って本来身につけなければならない能力とは何か。それすらも混沌^{こんとん}とし、家庭も教育も自信を持ってそれを提示できない。当然、こどもは何を信じ、何に従っていけばいいのか分からない。そして、大人もまた、情報の多さにどう対峙^{たいじ}していけばいいのか分からないのである。それどころか、対峙することの苦悩から無意識に逃れ、情報をうのみにしたり、情報から目をそむけている。つまり自ら物事を判断し、決めることができなくなっている。それは人が主体的に生きていくことを放棄する行為なのだが、そのことにすら気付いていない。その兆候はさまざまな社会現象として現れているし、個々人の行動の中に隠れている。（第3段落）

何かを決めるために迷い悩み、時に不安になることはだれにでも起こることだ。情報が氾濫し、しかも先行きが不透明な現代にあって、決められなくて悩むのは自然なことでもある。今後も情報が減ることは考えられない。だからこそ、

（第4段落）

（注）対峙 — 対立して向き合うこと。

（出典 清家洋二『決められない！—優柔不断の病理』）

問1 第1段落から第3段落までの内容を100字以内で要約しなさい。

問2 この情報化社会の中で私たちはどうすべきだと考えられるか。下線部「だからこそ」の後に続く内容を考えて書きなさい。